

る。この場合輸送機關や尿尿配給距離の變化、肥料としての經濟的負擔等の問題を東京都に例をあげ、戦前その配給密度は江戸川沿岸に最も高く、その配給圏は東京驛より凡そ十二里の地内に最も多く配給されていたものが、戦中より戦後にかけての自動車輸送力の減退はこの配給圏をぐつと引締め、都當局の直送範圍即ち七里の圏内に壓縮されたとのべている。一方肥料としての尿尿價格はその距離と都市の大きさに規定されることを述べ一人一日の勞力で搬出し得る量は、その勞賃との比較において自由市場における肥効價より安い場合のみ成立されるとなし、通常人口二十萬、半徑二里以下の農家迄の距離が三里半の都市で市では、都市の側に別段の施設をしなくても、近郊農民が自己の車をもつて積極的に汲みとりに来て、經濟的に引合うが、それ以上になると賃勞働に出て自由市場でヤミの肥料を購入した方が有利であるといった結論を用いている。その他零細經營からくる農業所得の低きにもかゝらず戦後とくに供出と租稅負擔に苦しむ農家の姿等がえがかれている。特論ともいへば各地域の近郊農業については、たとえば東京都についていへば明治以降の蔬菜栽培の種別反別月別の變化、

第一次大戦後の温室フレームによる促成栽培の發達、都心よりの距離と地代並びに農業經營の變化等が、大阪についていへば主要蔬菜類の需要と府下の月別生産量を比較、生産出荷と消費との關係を各蔬菜について説明し、玉葱のみは市の需要を滿し、尙その二倍の出荷能力をもつこと、他の場合はしからざること、他の場合はしからざること等を述べ、一般に大阪の町村は耕地の細分化が東京よりも進行し勞働集約的兼業農家がとくに多いことを注意している。京都の場合これに反して專業農家の戸數多く、自小作農耕作面積も平均一町歩を超えていること、またこゝでは市需要量の七―八割が府下で供給されていること等のべられてゐる。

本書は表題にもある如く近郊農業論であつて、十三から成る各章は、著者がかつて「都市問題」その他各種の雜誌に發表されたものを後に結び合せ一冊の書としたものゝように見受けられる。その點で各章毎に着實な實證的研究や豊富な資料があげられ、これだけで既に我々の研究を益するものが少なくない。只欲をいへばその爲に、各章毎の連關や、概論と特論との關係がなお一層有機的にとけ合はず、その研究の比重も特論の方がやゝ弱い様

に感じられるのが淋しい。また特論中各地域の近郊農村を論じたら、全體として見たる各都市の比較や特質が少く、結論で「大都市の周辺には衛星都市が存在し、甲都市の周辺の近郊農業は同時に乙丙都市の影響下にある。云々」と述べ乍ら、本論に於ける研究は單なる一都市を抽象した論議のみであり、この點われ／＼地域性の影響を重視する地理學徒の讀後感はなおあきたらぬものが少なくない。同様に近郊農村の地域を問題にし乍ら、具體的な地理的地域が少しも叙述されていないことは、著者の立場が農業經濟にありとはいへば、この種接觸領域を研究する學者が、日本の場合、今日なお自己の立場のみを墨守し、他の立場の教養を缺くといつた一例を示す様に思える。こういう意味において反對側におかれた地理學徒にとつて本書は必讀の良著であると考へる。

(A5版、二五四頁、昭和二五年)

實業之日本社發行 定價二八〇圓)

—— 藤岡謙二郎

松田智雄

イギリス資本と東洋

一 東洋貿易の前期性と近代性

イギリスの「東洋貿易」に示される特質は三つの規定的契機において把握されねばならない。第一に「それが一極において接する本國社會を支配する構造的法則性」、第二に「他の一極において接するアジア諸社會のそれ」、第三に「貿易を擔う商人の階級の規定性」、がこれである。本書でとりあげられるのは、これらの諸契機のうちでも、「とりわけ貿易の擔い手である『商人』の規定性」に限られる。すなわち「商業資本の歴史的 성격」が問題の中心にすえられている。そして第一の契機すなわちイギリス社會の規定性は一應問題の前提として背景に退き、第二の契機すなわち東洋とりわけ中國社會の規定性は今後問題として残されているのである。

ところでイギリスと東洋との關係を歴史的にたどるとき、そのもつ性質において本質的に相違する二つの段階が見うけられるのである。その轉回點は「一七八六年のベナン占領から對清阿片戰爭に至る五十四年間」に求められるのであるが、「こゝにイギリスと東洋との關係は、前近代的なそれから、近代的な

それへの發展を進める」のである。「前者はイギリス對東洋の關係を、イギリス東インド會社が媒介する時期であつて、之に對して後者は近代イギリスとアジアの帝國清とが直接の關係に入るに至つてついに頑強に固執し續けられていた清帝國の封鎖性を破壊し、これをヨーロッパ・アメリカ諸資本主義社會の市場として開放したところの時期である」。かつては、貿易の擔い手である「商人」も當然その性質を異にしなければならぬ。いわゆる前期的商人である「東インド會社」と、近代的商人である「自由貿易商人」との、貿易の擔い手の交替がそこに見られたのであつた。「東洋貿易の前期性と近代性」という副題でもわかるように、本書はこの二つの異つた貿易商人の交替、貿易の質的轉回を第一の焦點にとつて、イギリス「東洋貿易」の特徵的な發展をまず明かにしようとするのである。

本書は三章に分れる。第一章「東洋政策前史」にあつては、上述の觀點から東インド會社の没落過程がとりあげられる。東インド會社はまさしく前期的獨占的商業資本の典型的な歴史的存在形態であつた。従つてイギリス

本國における産業革命が進行するにつれて、綿業を基軸とする産業資本家層の利害が東インド會社のそれと對立の溝を深めてゆくのは當然であり、東インド會社批判は國民的輿論としてしだいに高くかゞげられていく。その中にあつてラッフルズが一八一九年マライ半島の南端にシンガポールを建設し、これを「自由港」として宣言したことは、イギリス近代「自由商人」の最初の前進であつたのである。彼等の第二の前進はついで清帝國にむかう。阿片戰爭による清國の開放、「自由港」香港の獲得がこれである。第二章「新しき東洋政策」は阿片戰爭を中心としてイギリス「自由商人」の清國進出がとりあげられている。

香港はかくてイギリス「自由商人」の清國貿易における據點として發足し、成長する運命を與えられた。本書の焦點はこゝで香港イギリス資本の發達に移され、その發達の特殊性が浮き彫りにされてゆく。香港イギリス資本は、それが近代資本たる本質を具有する限り、そのもつ法則性を貫徹し、その正常なる發達の經路をたどるべきであつた。にもかゝらずそれは本國社會にみられない特徴をしないで明かにしつゝ、發達をとげたのであつ

た。第一に「商業の優位と資本集中の早熟な發生」がある。ジャーディン・マジソン商會を先頭とする貿易商人のコンツェルジ的資本集中、にもかゝらず資本構成の序列における香港上海銀行、貨幣取引資本・貿易商會、商品取引資本・各部門企業、産業資本という序列の特質、およびその序列における商會、商品取引資本のもつ比重の決定的優位性は、資本の前期的性格を問わずして物語つてゐる。第二に「凡ゆる企業が自己資本に依據し、他人資本を導入していない事實」がある。株式会社でありながら株式を公開せず、また株式を公開しながらお譲渡制限條件を附している事實は、まさしく企業集中體の「同族會社への傾向」を示すものであり、その前期的獨占性を現わしているものといえよう。第三章「香港における『獨占』資本の形態」は香港イギリス資本のかような特殊性を明かにしてゐるのである。

「イギリス本國における産業的中産階級の勃興」とこれに基く産業資本の擴充と展開、これが生み出す近代的商品、綿製品の販路のために仕える自由貿易、その精神と運動との東洋における擔當者こそは自由商人に他ならなかつた。その自由貿易への情熱と不屈の實

踐とは高い歴史的意義を賦與されねばならぬ。

しかるに香港イギリス資本は「その高揚する自由貿易精神にも拘らず、先には阿片貿易に關係し、また十九世紀八十年代にすでに完了した前期的企業集中組織によつて、範疇的な前期的性格を帯びることになる」。それは「西ヨーロッパの最新の資本集中に對しては、明かに特殊である」。いまかような類型をヨーロッパに求めるとすれば、それは封建的社會の末期、十六世紀の前期的獨占商人、たとえばフツガー家の如きに、むしろ求められるのである。これはいつたいなぜだろうか。「いうまでもなく、前近代的社會たる清國に密着することによつて規定を受ける結果に他ならない」。最初にふれたように、イギリス「東洋貿易」の性格を規定する契機は三つかぞえられた。著者はイギリス本國社會の構造と發展の法則をたえず前提におきなながら、貿易の擔い手である「商人」の歴史的な性格を分析の對象として來つた。そして著者は香港の近代的「自由商人」の性質の中に、「自由商人」の本來的な運動法則をもつてしては律しえない或る前期的な歪みを見出したのである。これを解く鍵は當然清國社會の規

定的契機に求めなければならぬ。しかし本書はこゝで終つてゐる。著者もいうように、問題はなお今後に残されてゐるのである。(A5版・日本評論社・定價三九〇圓)

——北村敬直——

北九州古文化圖鑑 第一輯

北九州の地は考古學的にみて、我が古代文化の上に極めて特色ある役割を果してゐる。

即ち地理的にみて大陸に最も近い位置を占めるため、古代の先進文化國中國及朝鮮の優れた文物が先ずこの地に流れ入つてきたばかりでなく、それらを日本的に消化する能力をも持つており、先史時代のある時期に於ては、我國の最も著しい文化の中心地であつた。その後中心が畿内に移つた後に於ても、やはり新文化流入の通路として、常に外國からの刺戟をうけ、他地方にみられない特色ある様相を呈しているのである。

所が従來この地の特色ある文物に關しては十全な形で學界に紹介される所が少なかつたために、正しい理解がなされなかつた所がある。本書はかかる不足を補うために福岡縣高